

諏訪上社御柱祭りノート

—— 歴史の隠喩 ——

友 杉 孝*

Suwa Onbashira Matsuri

Takashi TOMOSUGI*

Every seven years the *Onbashira Matsuri* (pillar festival) is held at Suwa shrine. The main event is the dragging of the *Onbashira*, a great log weighing 11 tons, from a mountain some 15 kilometres away to the shrine. The dragging of the *Onbashira* by thousands of people is a powerful attraction both to tourists and local people alike.

The festival is divided into two parts, first, called *Maebiki*, being the procession from the mountain to the village, and the second, *Satobiki*, the journey from the village to the shrine. Between the two parts there is a month's intermission, *Maebiki* taking place in April and *Satobiki* in May. The former is characterized by its masculinity, as young men proudly ride the *Onbashira* as it is dragged through the crowd. *Satobiki*, on the other hand, involves

gay processions, with groups of masked people and a feudal lord's procession adding to the cheerful atmosphere.

During *Satobiki* people are freed from their everyday activities and jobs, so that they may enjoy along with visitors all there is to see. The social norm is reversed at this time as economy gives way to extravagance. With the planting of the *Onbashira* in a ritual performed by priests, the festival ends and everyone returns home and resumes normal life. They have, however, been vitalized by the excitement of the festival. In consequence, the *Onbashira Matsuri* can be interpreted as a renovation of life through a pillar which is believed to be the symbol of a supernatural power.

は し が き

小稿は、タイ農村を研究している立場からみた日本社会の1断面を描いたものである。チャオプラヤー・デルタの農村から帰って来て、日本の農村に接すると、まず「土地」にからまる印象で圧倒される。たとえば、水田の高い生産力、先祖伝来の土地という表現で示される土地崇拜、村落を単位とする地縁関係の強さ、村落の領土といわれる土地の明確な限定性、さらに土地所有に基盤をおいた戦前までの身分階層性など、多くの際立った特徴

が指摘されよう。いうまでもなく、これら諸特徴は個別にばらばらにあるのではなく、すべて相互に不可分に結びついてみられる。すなわち、一つのことの多様な形相である。筆者は、土地をもっとも主要な経済蓄積とした歴史の反映であるという視点から、この問題に接近を試みつつある[友杉 1979a; 1980b]。近世社会を通じて土地改良は大規模に、かつ細密に進められて、土地に対象化した経済蓄積は極限に近くまで達した。この結果、いわゆる特殊に日本的といわれることがらが形成される。しかし、特殊に日本的とみられることがらの中にも、普遍的なものが内在しているのでなかろうか。

* 立教大学文学部; Faculty of Literature, Rikkyo University

小稿は、非日常である祭りの参与観察にもとづく資料におもに従い、諏訪御柱祭りを共時的に記述する。たしかに、土地に基盤をおく社会関係によって御柱祭りは実行可能となる。しかし、祭りの構造は普遍的な意識を明らかにする。具体的な祭りの形相は大変特殊ではあるが、構造は普遍的である。特殊に日本のものであるものが、同時に普遍的でもあることを記述したい、と考えている。

I 諏訪上社と御柱

諏訪上社の本宮と前宮（以下、これら二つの神殿を総称する場合、たんに諏訪上社とする）は、守屋山（1,650m）の東北山麓の急斜面が諏訪湖南部の沖積地に接する土地に所在する。すなわち、平地が山地に変わる地点、山の口に立地する。最初、神社を訪れた時、このような神社の立地は、『常陸風土記』行方郡の周知の記事に収められた開拓説話を連想させた。開拓によって荒地が耕地に変わり、この結果、荒地を領有していた夜刀神（蛇）が耕地のはずれの山の口の宮に祠られるという話である。諏訪の場合と同じく、人間が支配する土地の境界に神社が立地する。開けた水田地域をすぐ前にして、諏訪上社はうっそうとした深い森林に囲まれ、境内は山地に移行する。山地は荘厳の気に満ちる。守屋山は昔から信仰の対象であった。雨乞い儀礼も山頂で行われた [宮地 1931: 24-25]。¹⁾ すなわち、太古において、文化が果てるちょうどその地点に諏訪上社は建立された。人間の力を超越する力が諏訪上社に象徴され、この超越する力の加護によって、諏訪から八ヶ岳山麓一帯での人々の生活は安堵したのである。

この諏訪上社の祭神は、いうまでもなく武

御名方神である。出雲系の神である。しかし、武御雷神との争いを述べた有名な国譲り神話のほかに、諏訪上社には別の神話も伝わる。すなわち、武御名方神と地主神である守屋の神との争いである [伊藤 1978a: 46-52]。²⁾ この結果、出雲系の神が在地の古くからの土地神を従えることになった。神社の最高位であった大祝は諏訪明神の現身で、大祝に次ぐ神官は神長官と称え、守屋の神の子孫であるとされてきた [同上論文: 51-52]。

在来の土地神の上に出雲系の神がかぶさって諏訪信仰が形成されたが、大変興味あることに、両者とも竜蛇信仰に深く関わっていた。³⁾ 周知のように、出雲系の人々は、三輪山大物主神が神話に蛇体として現われることで示されるように、竜蛇信仰を奉じていた。他方、土地神の守屋の神に従う人々も竜蛇を神の象徴として信仰していた。ミシャグヂ神である [古部族研究会 1975]。⁴⁾ ミシャグヂ神は蛇と男根を示す石柱で象徴される。八ヶ岳山麓の尖石遺跡からは、縄文中期の蛇体模様の土器と男根を示す石柱が出土する。太古から蛇が信仰の対象であったことを物語る。現代でも、男根を示す石柱に対する信仰は盛んである。たとえば、上記尖石遺跡に所在する尖石は、上部に凹みのある岩石が土中から地表にぽっかりと露出した石である。この尖石のすぐかたわらに道祖神の小祠があり、中には御神体として、男根を示す小さな石柱が納められている。小祠の上には小石がいくつも積み重ねられていて、人々の厚い信仰が衰えていないことを示す。災害からの安全が祈

2) 大変すぐれた研究で、宮地とともに基本文献である。

3) 日本古代の儀礼を竜蛇信仰と中国思想の影響という視点から論じた吉野裕子の仕事は、興味深く示唆的である。吉野の2文献 [1979a; 1979b] において、諏訪神社の竜蛇信仰も論考されている。

4) ミシャグヂ信仰の民俗と遺跡に関する論文数篇が収められている。有益である。

1) 現在でも諏訪神社研究の基本文献であることは、少しも変わらない。

られるのである。

このように出雲系の神も土地神もともに竜蛇信仰によっていることは、当然、諏訪明神の御神体は竜蛇であるとする考えを創出するであろう。文献で確かめておこう。

たとえば、『諏訪大明神絵詞』の縁起には、蒙古襲来に際して、諏訪明神は竜蛇の御神体を顕現し、西に向かったという記事がある[伊藤 1978b: 54-56]。『安居院 神道集』の「諏訪縁起」では、主人公甲賀三郎は蛇に変身する。甲賀三郎は人間の姿に還り、のちに諏訪明神として崇められた[同上論文: 66-60]。神社の行事においても蛇体は現われる。『諏訪大明神絵詞』の祭第7である[同上論文: 67-68]。12月22日、御室に第一の御体を入れ、ここに大祝以下の神官が参籠した。同29日、さらに御体3体を入れた。冬は穴に住んだ神代の昔を想起させる、と記事は述べる。『年内神事次第旧記』の12月26日の条から、ここにある御体は藁か茅で作った蛇体で、諏訪上社の祭祀によって安堵される村々で製作されたことがわかる。蛇体を飾る麻と紙も村々の負担であった[同上論文: 68-69]。冬から春にかけて冬眠し、脱皮する蛇の生命力の旺盛さになぞらえて、魂の再生と増殖をはかった行事である[同上論文: 72]。この御室の行事はとうに廃止されているが、諏訪明神の御神体は竜蛇であるとする信仰は、現在でも深く民俗の基調にあり、⁵⁾あとで詳しくみる御柱祭りでも強烈に表現されるのである。

御 柱

諏訪上社本宮の表参道を社殿に向かって進

むと、すぐに巨大な柱が眼に入る。向かって左で、一の御柱である。一の御柱の左に二の御柱、二の御柱の後方の山地斜面に三の御柱、さらに三の御柱の右、つまり一の御柱のずっと後方の山地斜面に四の御柱が、それぞれみられる。この4本の御柱が諏訪上社本宮の社殿を囲んで、一つの結界を構成しているようにみえる。

一の御柱に再び戻って、周囲を観察すると、御柱のすぐ後ろに表面に大きな凹みのある岩石が地中から現われ出ていることに気づき、人々ははっとさせられる。ちょうど、大地の臍あるいは裂け目という印象を与えるからである。ともあれ、異様な岩石である。さらに、この岩石のすぐ後ろに接するように、2mほどの男根を示す石柱が建てられている。かつて、兵隊に徴集された時、人々はこの石柱に小石を積み、武運長久を祈ったという。いまでは家内安全である。ところが、再び御柱をみると、御柱の周辺にも小石がいくつも積み重ねられているのである。これは家内安全の祈願とも賽の河原の小石であるともいう。すなわち、凹みのある岩石に対する関係性においては、男根を示す石柱と御柱はまったく等しいといえよう。さらに、先にみた尖石遺跡での凹みのある岩石と道祖神の石柱の組み合わせをも思い出される。明らかに、諏訪上社本宮の岩石と石柱の組み合わせは尖石遺跡に所在する組み合わせに等しい。いかえれば、御柱を巨大な道祖神の石柱とみることが可能である。人間が支配する耕地・集落から人間の支配の届かない山地・自然への変換点に所在する境の神である。諏訪一円の人々の生活を災いから守護すると同時に、多産豊饒を象徴する。御柱の先端は三角状に鋭く削られていて、まさに男根を示す石柱と同形である。さらに、この形態は蛇体をも強く連想させる。⁶⁾ 諏訪明神の御神体は竜蛇であるという信仰と、御柱の形態はぴったり重な

5) 5月4日、前宮の第二御柱を曳き建ての際のハプニングである。見物客の雑踏の中で、60才くらいのおじいさんがこの神社の神様だよといって、小さな蛇を近くの女の子に取りつけた。母親が気づいて、キャッと叫んだが、周囲の人はどっと笑った。

り合うといえよう。

本柱の数が4本であることにも一言せねばならないであろう。これまで多くの人を悩ませてきたこの問題を解くことは、まったく筆者の能力外である。⁷⁾しかし、さしあたって、筆者は4本という御柱の数は中央集権の確立を意味すると推定しておきたい。すなわち、水田の生産力に基礎をおく中央集権の確立によって、道祖神と等しい1本の柱をよりしろとする神は、4本の柱で結界された場に顕現する神に変換した、と考えるのである。そして、狩猟から水田耕作への移行は、社会を著しく定着化させたであろう。

II 御 柱 祭

7年ごとにめぐり来る寅と申の年に、諏訪大社の御柱は上社でも下社でも更新される。⁸⁾古い御柱は取り去られ、山から運ぶ新しい御柱が替わる。上社の本宮と前宮、下社の春宮と秋宮のそれぞれに4本の御柱が建つ。

すなわち、7年に1度の御柱祭りである。⁹⁾小稿では、上社の御柱祭りに限定して記述を

6) 異様な印象を与える石に対するこの地方の信仰について、すでに、宮地が指摘している[宮地 1931: 31-35]。

前出の吉野は、御柱の三角状先端を蛇の象徴と論じ、御柱を石器時代の石棒からの進化と推定する。さらに、御柱の数4は、中国思想の方形で、大地を意味するとされる[吉野 1979b: 273-274]。

7) 宮坂清通が、御柱の意義として、御柱の数に関わる諸家の見解を紹介している[宮坂 1956: 29-64]。

8) 何故、寅と申でなければいけないかという疑問に対して、吉野は興味ある見解を示す。すなわち、寅は陰から陽に、申は陽から陰に、それぞれ移行する時であるという。したがって、御柱の建て替は、陰陽の交代のダイナミズムであり、万物の輪廻であると解釈される[吉野 1979b: 274-278]。

9) 宮坂 [1956] が御柱祭りのほとんど唯一のまとまった文献であろう。宮地の御柱に関する記述 [1937: 196-326] は現在でも基本的である。小稿の記述も、上記2文献に多くを負う。

進めたい。下社の御柱祭りも上社とほぼ同じ形態であり、上社の祭りの1週間後に行われる。準備、伐出し、山出し、里曳き、家の中の5小節に分けて記述したい。

準 備

御柱祭りの準備のピークは2月15日のくじ引きである。どの村がどの御柱を曳くかを決定するくじ引きである。氏子集団が8地域ブロックに編成されていて、これら地域ブロックは本宮と前宮の御柱8本のうちのどれかを曳くことになっているのである。8地域ブロックは次の通りである。本郷・境・落合、米沢・北山・湖東、原村・泉野、茅野・宮川、玉川・豊平、中洲・湖南、金沢・富士見、四賀・豊田である。隣接する二つあるいは三つの町村が一緒になって一つの地域ブロックを構成する。これら8組の地域ブロックは御柱祭りの時にのみ構成され、機能する。お祭りが終われば次の祭りまで何もすることはない。これら8組の地域ブロックの組み合わせは明治11年にさかのぼる[宮坂 1956: 128-131]。明治維新後、御柱祭りを氏子の力だけで実施するために、8本の御柱を曳く八つの組み合わせが決定されたのである。さらに明治17年、諏訪の四賀村と豊田村が下社の氏子から上社の氏子に編入されたために、この組み合わせも改まった。以後、ずっとこの時の組み合わせで御柱は曳かれてきた。そして、戦後、昭和25年、現在まで続く組み合わせに再編された。しかし、2回の変更があったが、組み合わせの大部分は明治11年以来変わっていない。すなわち、組み合わせは非常に安定的である。地域の社会統合の単位をなす村落社会が非常に安定していたことの反映であろう。それぞれ確定した領土を基盤とした安定した村落社会を構成単位とするから、御柱祭りの実施も可能となるのである。たんなる個人の集合の組織ならば、とても実施は不

可能であろう。

くじ引きは独特の興奮した雰囲気の中で行われる。どのブロックもよくくじを引き当てたいからである。とくに、経済力のある熱心なブロックは、本宮の第一の御柱（以下、本一と略記。本二、本三、本四も同じである）をどうしても引き当てたいと願う。そこで、くじを引く地域ブロック代表は、くじ引きに先立って、2、3週間もお宮詣でをして、本一のくじに当たることを願うこともある。かつては、上社に多額の寄付を行えば本一に当たるとかの噂もあった。まさに、くじ運という超越的な出来事と金力という人間的な事柄が交錯する場である。しかし、現在では各ブロックとも一律5万円の寄付に決まっています、金力が働く余地はなくなりました。

2月15日は11時からくじ引きが始まる。8ブロックを代表する8人の大総代と700人ほどの応援する人々が神社につめかける。人々はオンベ（御幣）と町村旗を振りかざし、木遣りをうたって氣勢をあげる。8人の大総代は、まず社務所でくじ引きの順を決めるくじを引く。このあと、拜殿に移って、さらに順番くじを引く。この間、祝いの煙火があげられ、太鼓が乱打される。いよいよ本番のくじ引きである。まず、宮司が祝詞を捧げ、くじ引きに入る。境内では進軍ラッパが鳴り渡る。この結果、ことしは、本一は金沢・富士見ブロックに決定した。以下、本二は玉川・豊平、本三は原・泉野、本四は本郷・境・落合である。さらに、前宮の第一の御柱は中洲・湖南に決まり、前二は四賀・豊田、前三は米沢・北山・湖東、前四は茅野・宮川に決定した。熱心で経済力もある茅野・宮川ブロックは前回に続いて前四で、ひどくくじ運がないことに落胆した[毎夕新聞 1980:7]。¹⁰⁾

10) 毎夕新聞「諏訪の御柱祭」によって、くじ引きの経過を記述。この文献は、毎夕新聞に掲載された御柱祭り関係の記事を大判のパンフレットにまとめた特集号である。

本一はもっとも巨大で、もっとも人目につく場所に建てられる。したがって、本一を曳くブロックは、もっとも人目に派手に映る。かっこうよくみせることができるのである。他方、前四はずっと小さな御柱で、建てる場所も人目につきにくい。見物人も少ないというのである。

くじ運であるとはいえ、前四などを引くと大総代は大変である。村落の若い衆たちは祭りに張り合いがないといって、大総代に何かとけちをつける。この前の御柱祭りでは、前四を引いた大総代は、祭りの期間中、東京の娘の家に避難していたという。若い衆の不満をおそれてである。今度の御柱祭りで前四を引いた大総代は、自分の家に祭り衣裳を投げ込まれた。若い衆をなだめるのに酒を持って謝り歩いたそうで、100万円も使ったとかいわれる。いずれの話も口伝の噂ではあるが、もっとも見映えのする本一を曳きたいという若い衆の気持はよく表現されている。あとでみるように、御柱を曳くことは男の最高の見せ場であるからである。

くじ引きのほかにも準備はいろいろある。綱打ちも大切な準備である。各村落はそれぞれ共同で綱打ちを行う。農道で木遣りをうたいながら、藁をたたいてよる。周りが30cmもある元綱もなわれる。各村落はそれぞれ20mくらいずつ分担し、つないで1本が100mほどの綱に仕上げる。綱の安全をはかって、現在では綱の中にワイヤーを入れて強化してある。御柱の派手さにかくれて目立たないが、綱は曳行に不可欠であるばかりでなく、象徴的な意味も与えられている。綱を束ねておいてある状態は、まさに蛇のとぐろにそっくりである。綱には2種類あって、それぞれ男綱に女綱と呼ばれる。

祭りを活気づける木遣りの練習も大切である。木遣り独特の声と調子を体得するためには、まず1カ月くらいは声を張り上げて、「声

をつぶす」状態を経過しなければならない。木遣り喉自慢を人々は競い合う。木遣り上手はかっこうよく、一つの粋なのである。木遣りの美声は人々を興奮に誘い、木遣りの音頭が御柱のテンポを決定する。木遣りが下手であれば、御柱も動かない。村落で1番の喉が鳴って、初めて御柱は威勢よくどどっと動き出す。

伐出し

御柱になる樹木の伐出しは、八ヶ岳の御子屋山で行われる。諏訪上社の社有林である。御柱祭りの前年、まず、御柱に適する樹木の選定が行われる。見立て行事である。今回は、昨年6月3日、この行事が厳かに執行された。宮司、氏子総代など約60人が参加した。午前8時、上社をバスで出発して、御子屋山に向かった。御子屋明神で神事を済ませたのち、仮見立ての済ませてある樹木を検分し、参加者一同の異議がないことを確かめてから、宮司は本一以下の御柱となる樹木を決定する。今回の本一の樹木は、根回り2.52m高さ20mの樅の大木で、樹齢500年である。注連縄を張り、「本宮一の御柱」という木札を取りつける。さらに、宮司は薙鎌を樹木の目の高さの位置に打ち込む。おね鎌打ちである。薙鎌は先端が鳥の首に似た独自の神器で、諏訪明神の象徴とされる[同上書：16]。すなわち、お見立て行事は特定の樹木が神のよりしろとなることを示す占有儀礼である。御柱となる大木が、諏訪上社から遠く離れた御子屋山で選ばれることは興味深い。御柱の曳行が、八ヶ岳山麓から守屋山山麓にいたることになるからである。この間に耕地と集落が立地する。いいかえれば、耕地と集落の一方の境界から他方の境界に御柱は移動して、人々の生活に活気を与え、加護することになる。

今回の御柱の樹木の伐出しは、3月2日に

行われた。上社宮司と氏子総代など総勢500人が、早朝6時に上社をバスで出発して御子屋山に向かった。美濃戸口でバスを下り、積雪を踏み分けて御小屋明神の祠に到着して神事を行なった。伝統的に山作りに当たってきた神之原の山作衆8人が最初に斧を入れたあと、労力奉仕の人々も参加して伐木した。山作衆の使う鋸、斧などは火入れ式で浄めた特別の道具である。伐り倒した樹木の枝払いをし、尺取りし、樹皮をはぐ。梃子を取りつける差し込み口をうがつ。こうして樅の大木は御柱の形態に仕立てられる。でき上がった御柱を地元業者が八ヶ岳農場の綱置場に運搬する。祭りの日まで、御柱はここに安置される[同上書：8]。

現在では地元業者が山から綱置場まで御柱を運搬するが、かつては前述の地域ブロックの人々が運搬した。中洲・湖南ブロックは穴山の寺に泊まって、早朝1時に山に向かう。若い衆は酒を飲みあかす。松明と高提燈を掲げて登ってゆくありさまは、遠く神宮寺からもはっきりと望見できた。美しいものであった。御柱に仕立てあげられてある大木に綱をつけて、綱置場まで下りる。ごろごろある大石にぶつかり、小さな谷川にはまりなどして、競争して下ろすのである。お祭り気分は盛り上がりゆく。

山出し(前曳き)

山出しは4月5～7日に行われた。八ヶ岳農場の綱置場から木落しまで13km、木落しから安国寺の御柱屋敷2kmの間、御柱はそれぞれ曳行された。山出しから御柱祭りは開幕し、多くの人出で賑わうことになる。

綱置場で、御柱のメド(目所)にメドテコ(目所梃)を打ち込む。曳行する御柱のバランスをとるために、御柱の先端に2本の丸太材が左右から打ち込まれる。丸太材の径は4～5寸、長さ1丈2尺で、2本の間は約90度

に開く[宮坂 1956:13-14]。末尾にも同形の、しかし小型のメドテコを打ち込む。興味あることに、諏訪下社の御柱にはメドテコを取りつけない。上社は男神で、下社は女神であるからという。メドテコは蛇のオスの男性器にそっくりの形態である。メドテコには命綱がつけられ、メドテコの安定がはかられている。左右の命綱が曳かれるたびに、メドテコは左に右に揺れるのである。

御柱の曳綱は2本取りつけられる。御柱に向かって右側が男綱、左側が女綱である。綱の長さは100mほどで、御柱にすぐ接する元綱は径30cmもある。興味あることは、綱に男女の名称がつけられているほかに、これら2本の綱を御柱のところで結びつけていることである。すなわち、男綱の絢い終り(山の神)と女綱の絢い始め(蛇口)を合わせる[同上書:14-15]。男綱を曳く人々と女綱を曳く人々は、根本において固く結ばれているのである。左右あるいは男女という分類原理によって人々を区別することはできない。一つの綱に結ばれている限り、人々は力を合わせなければ御柱は動かない。ふだんの生活での、お互いの利害関係をも無視して、みなが力を合わせる。一つの綱に関わる限りでの共同体である。したがって、他の綱を曳く共同体とは対抗関係を形成する。

4月5日、御柱は綱置場より、約3km離れた、玉川の寝の神(子の神)に向かう。朝8時、全員集合。8時30分より曳行を開始した。先頭に本一が立ち、以下、前一、本二、前二、本三、前三、本四、前四と続く。本一を曳く富士見・金沢ブロックは、村落の人々約1,000人を日当700円で動員した。名目的ともいえる安い日当である。このように若い衆を総動員したので、村落には年寄りだけが留守番に残っているようである。前一を担当する中洲・湖南ブロックは日当なしで同じく1,000人ほど動員している。御柱祭りの初日

ではあるが、御柱が通る御柱街道には1km以上もの人々の列ができた。本二を曳く玉川・豊平ブロックは、今日はちょうど、自分たちの村落の中を御柱を曳く。このため、特別に御柱はたっぷり練って進む。十分に時間をかけて楽しもうというわけである。お祭りでは、速く能率よく行うということは通用しない。おそくゆっくりと行い、お祭り気分に入る。このように本二がよい気分で練っていたため、後続の前二と本三の距離が縮まり、トラブルが起きた。前二のメド係の若者ふたりが怪我をして救急車で病院に運ばれた[毎夕新聞 1980:22]。これまで、御柱と御柱の距離がなくなって接する状態になると、喧嘩が必ず発生。喧嘩が祭りの雰囲気を一層興奮させたのである。御柱祭りは喧嘩祭りともいわれ、警備の警官も中に入って仲裁することができないほどである。警官が若い衆の意気に恐れをなしてしまう。

4月6日は木落しである。午前9時、前日1泊した寝の神から本一の曳行を開行する。木落しは茅野高校先の崖で行われる。30mほどの崖で、若い衆はメドテコに乗ったまま滑り落ちる。御柱の大木とともに滑り落ちるから、文字通り命がけである。もし不運にも御柱の下敷きになれば、確実に落命する。

大木の下敷きにならなくても、バランスを失ってメドテコから振り落されれば、怪我の可能性は大きい。このように非常に危険であるからこそ、木落しは若い衆にとって晴れの舞台になるのである。メドテコに乗ってオンベ(御幣)を振る姿は「男の華」といわれる。若い衆は高慢な態度で誇らしげに、かたずをのんで注目する大群衆に対する。

まず、本一の木落しである。午前11時に始まる。木遣りでメドテコのバランスを整え、若い衆はオンベを調子よく振る。大工の仕事着に似た若い衆の服装は赤と黒で、4月の陽射しに照らされて華美である。村落によって

は、赤と黄を選んでいる。ぴったりと体に密着した装いは、若い衆の動作を軽やかにみせ、彼らの誇りを顕示する。消防隊のラッパが一斉に鳴り響く。夏の甲子園で鳴るあの高校野球のラッパと同じ調べである。ラッパの音とともに御柱は崖を滑る。御柱が回転して、メドテコに乗っている若い衆たちはどっと落ちる。左右の命綱を木遣りに調子を合わせて曳き、御柱の態勢を立て直す。メドテコが左右に激しく揺れる。オンベを振る手が忙しい。再び、ラッパが鳴り響き、御柱は前に滑る。また横転する。何回か試みたのち、御柱は崖下まで曳行された。

木落しをみようとする群衆の数はどんどん増えてゆく。日曜日である。茅野、諏訪の人人の楽しみである。木落しをなるべく近くでみるため、前に出ようとしても、なかなか大変である。前の人頭越しでしかみられない。警察はマイクで声をからして、整理に追われている。御柱に近寄り過ぎると見物客は危険だからである。何しろ大木が滑り落ちてくる。揃いの法被を着た人々もロープの向かい側で忙しく動いている。メドテコには乗らないが、御柱の綱を曳く人、群衆の整理に当る人などである。法被は濃い空色で、背面は諏訪大社の梶の紋様である。赤で「祭」と書いた法被も目につく。衿に「若連」とある。法被をつければ、衣類による自他の区別はなくなる。みな一様である。ふだんの対抗関係も法被の下では解消する。

見物客は多様である。年寄りもいれば子供も多い。服装もまちまちである。みな楽しんで木落しをみている。本一の御柱が予定通り崖を下りたのち、昼の休みとなる。見物客は思い思いに家族が寄り合って弁当を開ける。近くに設けられた露店では、いか焼き、とうもろこし、たこ焼きがよく売れる。ビール、酒、ジュースの類もよく出る。フィルムを売る店もある。民家の軒下を利用したこの時だ

けの店である。見物客の多くはカメラを肩から下げており、8ミリで映画を撮っている人も少なくない。

午後からは前一の木落しである。午後2時に始まる。この間、本一の御柱は近くを通る国鉄・中央線のガードをくぐって御柱街道を宮川に向かう。国鉄電車も徐行する。道中、人垣で大変である。天候が崩れ、雨に変わる。しかし御柱の曳行は続く。国道を渡り、宮川にかかる橋の手前を右折し、水田を横切って宮川の土手にいたる。わざわざ橋を避けて、宮川の急流を越すのである。川幅40m。まず、御柱を土手に上げる。木落しは上から下に滑らすが、重力に逆らって土手を越すのは大変である。木落しと並んで、山出しのもう一つの見せ場である川越えである。

本一の御柱を土手に上げるまで、木遣りで調子を整えてオンベを振り、曳き子は綱を精一杯に曳く。やっとのことで御柱は土手に上がり、そのまま急流に落ちる。メドテコの若い衆たちも急流に落ちる。ずぶ濡れになりながらオンベを振る。八ヶ岳の雪解け水を流す宮川の急流は冷たい。今度は対岸に御柱を引き上げねばならない。木遣りの調子に合わせて、対岸から綱を曳く。そうこうしているうちに、前一が土手に近づく。本一は急がねばならない。国道を渡り、水田を横切る地点から、これまでの御柱曳行の順番に関係なく、競争して御柱を先に進めてもよいことになっているからである。

ついに、本一は対岸の土手に引き上げられ、土手下まで曳かれた。ここから安国寺の御柱屋敷まではすぐである。水田を横切って御柱屋敷にいたる。途中、綱が切れたがすぐにつなげた。御柱屋敷でオンベを振り、氣勢をあげてから富士見・金沢ブロックは解散した。続いて前一も御柱屋敷に無事到着する。川越えを予定されていた本二は土手の手前の中河原で留まり、川越えを明日にした。しか

し、前二の御柱はすっかり暗くなった宮川の川越えを行なった。本三以下の御柱は予定通り明日の木落しと川越えである [同上書：24]。山出しが終って、安国寺の御柱屋敷では8本の御柱の周辺を注連縄で振り、神主の玉串奉奠が行われた。

川越えも見物人で一杯である。相当の雨の中を押し合ひである。宮川を見下せる中央高速道の土手は人で埋まっている。川の対岸では、子供たちがオンベを振って応援する。土手に引き上げられた御柱がそのままの勢いで下に落ちる時、見物客ははっとする。大木とともにメドテコに乗っている若い衆たちも落ちるからである。大変危険である。事実、前回の御柱祭りでは、川越えで中洲の若い衆がひとり死亡している。御柱の下になったためである。少々の怪我をした人は、当然、多いであろう。まことに、木落しといい、川越えといい、荒々しい行事である。したがって、若い衆にとって雄々しさを発揮する絶好の機会でもあるのである。

里曳き（本曳き）

安国寺の御柱屋敷に安置した御柱を上社境内に曳行する行事が里曳きである。上社本宮とは2kmの距離である。途中、前宮が所在する。したがって、午前中に本一から本四までの御柱が順次に本宮に向かって出発する。午後は前二から前四が前宮に向かう。今回の里曳きは5月3日から6日まで行われた。5月3日、午前9時、本一の御柱を曳く富士見・金沢ブロックは御柱屋敷に集合し、10時に本宮が所在する神宮寺に向かって出発する。続いて、本二以下の御柱が時間をおいて出発する [同上書：5]。この御柱の里曳きも豪壮である。大きな丸太である御柱を400人くらいがかかって曳行するのである。木遣りの調子に合わせてどどと曳く。ラッパが鳴る。若い衆たちはメドテコに乗って、盛んにオンベ

を上下に振る。若い衆たちの華やかな出で立ちと濃い空色の揃いの法被は、祭りらしい独自の色彩の世界を創り出す。木遣りの節回しと雑踏する群衆の絶えまないざわめきが、この世界を音響によって多重化してゆく。

里曳きの雰囲気は人々を浮き浮きとした気分させる。御柱が神社に向かって練って進む時、神社から御迎え行事として神主と御船が御柱に向かう。御船は御輿ともいわれ、長さ2間半、幅1間半ほどの大きさで、当番に当たった村落が、御頭役としてかつぐ。薙鎌と鈴が中に入れられ、白幣が立つ。諏訪明神のよりしろである。見物客は御船に賽銭を投げ入れる [宮坂 1956：184-186]。かつて、この御迎え行事の行列の中に騎馬隊があった。警護のための参加とされる。しかし、祭りが風流化される過程で、騎馬隊は独立した見世物に変化していった [同上書：190-191]。今回も騎馬隊は行進した。お騎馬といわれる。

お騎馬は総勢は70人ほどである。行列の順は次の通りである。¹¹⁾

1. 旗持ち 1人 諏訪大社御柱祭り奉納騎馬。矢島ステンレスと大書してある。
2. 先払い（露払い）1人
3. 武士 3人 上下紋付き着用
4. 弓矢箱持ち 1人
5. 色傘（化粧傘）1人
6. 木遣り 1人
7. 挾箱 8人
8. 長槍（3間の長さ）8人 4人ずつ交代。
9. 小姓 5人 殿様の前3人、後ろ2人。子供。
10. 殿様 1人 馬に乗る。矢島家の小学4年生と、同じく幼稚園の子供が交代。

11) 神宮寺、藤森和良氏の御教示による。

11. 赤馬（しゃくま）4人 連隊旗
12. 立傘（芸傘）8人 芸をみせる。
13. 草履とり 8人 道化の仕草をする。立傘と組みになる。子供。
14. 沓かご 1人 かごをかつぐ。
15. 役員 20人

これだけの行列を整えるためには、相当額の寄付が必要であり、今回は地元出身の矢島ステンレスが100万円寄付した。お騎馬はまったくの見世物であり、先払いが下に下にといいお騎馬が街道を行進する時、見物客から祝儀が与えられる。立傘と草履とりは練習した芸を披露する。ジャノメの長柄の傘を空中に投げて、あごで受ける。現在では、お騎馬は時間を昔に戻した一種の仮装行列としてみることも可能であろう。

仮装がひととき目立つ行列は長持ち道中である。本来は里曳きに参加する氏子の人々の荷物と弁当を入れて歩いたとされるが、現在はまったくの見世物である [同上書：189-190]。20人くらいが1団となって長持ち道中が練り歩く。今回は七つか八つの長持ち道中が参加した。野村工業のように企業単位もあれば、村落が単位になる行列もある。長持ちをかつぐ人々は仮装を競い合う。だるまの道中もあった。とくに、男の女装が目立つ。さらに、後頭部に顔を描いている人、顔を黒く塗る人、胸から腹にかけて絵を描く人もいる。まさに思い思いである。見物人たちは仮装の奇抜さにはっとして笑い出す。さらに、身振りの面白さが笑いを増幅する。見物人の祝儀もはずむ。

笠踊りも里曳きに風流の趣きを加える。編笠をつけ、黒、赤、青などの原色を対比させた、派手な衣装を身につけ、顔を濃く化粧する。十数人が1団となって、街道ばかりでなく、村落内を練り歩く。身振り手振りを合わせて踊る様子は、里曳きの浮き浮きした気分

に華を与える。すなわち、人々の浮かれた気分が踊りになって表われるのである。笠踊りを家の前で待ち、踊る若い衆にハナ（祝儀）を与える。祝儀を包む家の前では念入りに踊りが披露される。

今回は、東京から女子大生4人がチアガールとして参加し、街道を往来して、見物客の拍手を浴びた [南信日日新聞 1980]。地元の女子中学生も楽隊に合わせて行進し、人々を楽しませる。このような新しい趣向が時代の流れを反映して登場する反面、消え去った見世物も多い。たとえば、サーカス、ロクロ首などである。戦前、里曳きはもっとゆっくりと時間をかけて行われていたようで、現在の3日間の行事を1週間もかけていたそうである。御柱の曳行も木遣りの調子がよくないといっは一休みし、その間、曳子たちはサーカスなどの見世物を見て楽しんだそうである。再びみなのがんが盛り上がれば、曳行を始めた。かつて、曳子の若い衆とサーカスが喧嘩して、サーカスの小動物が逃げ出す事件もあった。街道沿いのある家の味噌蔵に猿が逃げ込み、翌朝、家のおばさんをびっくりさせたという話も昔話になってしまった。

さまざまに装いと工夫を凝らした行列が里曳きの雰囲気華美に盛り上げる中を、最大の行列である御柱が練る。曳行を担当する地区ブロックの村落名を大書した旗が先頭に立つ。旗も行列の飾りに化してしまった。おやっとな気がついた時、本二の御柱の先頭に行く旗のすぐ後ろで、1本の竿がしなりながら立っていた。ひとりの男が身軽に竿をよじ登って、竿がしなったのである。見物客は彼の頭をみてどっと笑った。頭の毛をきれいに剃り落しているが、「本二」と読めるように毛髪がきちんと残されているではないか。町の床屋さんの2時間半の苦心作であった [同所]。みな酒を飲んで、いい気持ちでオンベを振り、綱を曳く。水代りみたいである。このよ

うに浮かれた雰囲気であるが、時には思わぬ事故も起る。何しろ御柱は大木である。本三のメドテコから若い衆ふたりが落ちて救急車で運ばれた。怖い事故の可能性を底に潜めながら、里曳きの快樂の気分は高まる。

里曳きの人出は山出しをずっと上回り、第2日目の5月4日は日曜日でもあって、10万人近くの雑踏である[同所]。雑踏が祭りの熱気を高める。街道は人と人で埋まる。両側の家々には特設の棧敷が設けられ、客は宴をしながら、通り過ぎる行列を眺め興じる。今年は棧敷の借料は1帖当たり1万5千円で、御柱のくじ引きがあった2月15日にすべて予約されてしまったそうである。遠方からの客も多い。長崎漁連とか海苔業者である。この地域の人が昔から海苔業界で活躍しているからである。企業名で占められた棧敷も少なくない。酒とかビールを売っている特設の店も多い。いか焼き、とうもろこし、お好み焼きなど、露店の食べ物屋にも次から次へと客が寄ってゆく。立ち食いである。

5月4日午後、本宮で御柱の曳き建てが行われる。山から曳行してきた御柱を神社境内の所定の場所に曳き建てる行事で、御柱祭りの最後の見せ場である。7年前の御柱はすでに4月に撤去され、地面に大きな穴があいていて、ここに建て替えるのである。

曳き建てに先だって、冠落しがある。御柱の先端を斧で鋭く三角状に削る儀礼である。神主が祝詞をあげ、櫛に白幣をつけてお祓いをして、塩を振り撤く。2時から冠落しが始まり、約1時間かかった。斧で御柱を削る時に生じる木片は、時々、空中に放り投げられる。群衆は争って木片を取り合う。社務所で木片に諏訪大社と書いてもらい、梶の紋の朱印を押す。安産のお守りで、また家の入口に取りつけければ災いを防ぐ利益があるとされているからである。煎じて飲む人もある。御柱は大木であるだけに、削り落された木片も相

当量ある。

この間、曳き建てをみようとする群衆の数はどんどん脹れ上がり、広い表参道は立錐の余地がないほどである。東京の満員電車の混みようと同じであると誰かがいった。互いにまったく面識のない間柄の人々が、偶然、体を接するばかりに隣り合っている。石段、屋根、樹木など少しでも高いところはすずなりの人である。社務所のマイクは、危ないから下に降りるようにと、女の声でひっきりなしに訴える。暑い5月の陽射しのもと、人々の熱気で異様な雰囲気がかもし出される。

3時から曳き建てが始まった。近くの大木からワイヤーを伸ばし、御柱を除々に曳き建てる。1時間近くかかった。御柱には若い衆がたくさんへばりついていて、御柱と一緒に上ってゆく。御柱の先端には身の軽そうな若い衆がオンベを振って、大群衆に応えていた。驚いたことに、若者はカメラを首から下げて、片手で写真を盛んに撮っていた。御柱と境内の大木をつなぐロープを利用して綱渡りをする若い衆もいる。御柱の高さは20mに近いから、ロープから落ちれば、見上げる見物客も大怪我である。上手に渡って、身のこなしの軽さと腕力の強さを群衆に印象づけ、拍手を浴びる。

4時近く、御柱は垂直に立った。夕陽を浴びて、垂直に直立する形態は、冠落しからみてきたためか、実に印象的である。すなわち、直立する大木に精気が充満して籠められたという感じである。御柱の先端からは餅、木片、オンベなどが下に投げられる。人々は争って取り合う。最後に若い衆はこの先端で倒立してみせて、大群衆に応えていた。本一の御柱の曳き建てと並んで、上社裏参道では本二の御柱曳き建てが行われた。

5月5日、本三と本四の御柱が建てられた。この日の見物客はずっと少ない。見物客が少ないと、祭りの雰囲気も十分には盛り上

がらない。あいにく、時折り、雨が少し降り始める。本三と本四の御柱はいずれも山の斜面に曳き建てる。本四で事故が起った。ワイヤーで御柱を曳き建てる時、様子をみに行った人が御柱の下敷きになり、死亡した。ワイヤーが切れたのである。今回の御柱祭りで初めての死亡事故である。怪我人は相当数である。軽傷あるいはかすり傷は数えきれない。御柱祭りはいたるところに死を潜ませた危険な祭りである。であるからこそ、古来、この地方の人々の心を揺り動かしてきたのであろう。

5月6日の諏訪上社本宮は、いつもと同じように閑散としていて、時々、団体の参拝客が訪れる。新しく建てたばかりの御柱が聳え立つ。御柱の周りに木柵が作られ、洗い米、マスお頭つき、野菜（ホウレン草、ニンジン、ナス、キュウリ）、酒、塩、塩ワカメ、オレンジが供えられている。11時から御柱固めの儀礼がある。柱が内に倒れると国内に災害が起り、外に倒れると外国関係で重大な問題が生じるとされるから、御柱の地盤は強く固めねばならない。

御柱固めの儀礼には中金子の氏子だけが奉仕に来る。40kgもある重い槌で御柱の周辺を固める。7年経過した古い御柱を撤去する作業も中金子の仕事である。かつて、撤去した御柱は8本すべて中金子に払い下げられていた。現在では、本宮の4本だけが中金子に払い下げられ、前宮の4本は他の村落に払い下げられるようになった。いうまでもなく、撤去された御柱はただの材木でしかなく、しかも古材であるから利用に難しい。神宮寺に払い下げられた前一の御柱は、5万円で本宮の前の観光客相手の食堂に売られた。現在、この食堂の前にでんと前一の旧御柱が建っているのである。

家の中にて

外では趣向を凝らした行列が練り歩いて、

華やかな浮いた雰囲気を感じているのに対応して、家の中も客が何人も招かれ、まあ「飲んで」、さあ「飲め」のやりとりで宴のまっ盛りである。私どもも神宮寺のある家に招かれよう。祭りの時は、見知らぬ客も招き入れられるからである。

筆者が訪れた家は、当年84才にもなる老人が大変元気に振る舞っておられる家族であった。ちょうど、この老人の奥さんの親戚6〜7人が富士見から祭りを見にやって来ていたところであった。ことしの祭りの話、昔の御柱祭りのことなど、話題はつきない。旧いアルバムが取り出され、一層に話がはずんだ。大きなお膳の上には晴れの日のご馳走がところ狭しと並ぶ。鯉の姿煮、さしみ盛り合わせ、いか焼き、竹の子の煮もの、八宝菜、魚のつくだ煮、味噌汁、赤飯など。酒、ビールはいうまでもない。子供たちにはジュースである。この家の嫁さんは、客への給仕に忙しく、みな話題に加わってお喋りすることもできないほどである。ほかの家でも同様で、御柱祭りの間は、女性は客の接待で忙しく、御柱の行列をみるができない、と昔からいわれている。やがて、老人はみなから所望されて、昔とったきねづかの木遣りをうたう。やんやの喝采である。続いて、喉自慢の客も木遣りをうたい、拍手を受ける。記念写真が撮られる。この間、ビールだ料理だと、客には間断なくすすめられる。筆者も食欲以上にたくさんいただいた。家の外では、前の通りを見物客が絶えまなしにぞろぞろと浮かれ歩く。時に顔見知りを通りかかると、必ず家に上がるように招くのである。

ところが、気がついてみると、宴で陽気にお喋りしているのは、主人役の老人と嫁さんのほかは、家族のごく近い親戚は誰もいない。この村落に住む老人の息子さんも娘さんも、宴の座敷にはほとんど現われない。嫁さんの実家もこの村落にあるが、実家の縁者も

姿をみせない。実は、玄関をはさんで向こう側が家族の居間で、テレビがあり、ここで家族とごく近い親戚が食事をしたり、お喋りしたりしているのである。長男の婚約者もこの部屋にいて、時々、料理の手伝いをしている。座敷と違う雰囲気である。

すなわち、座敷に招かれる人は客であり、家の人ではない。客はふだん会うこともない遠い親戚とか顔見知りである。友だちの友だちというまったく面識のない人も客である。筆者は友だちの友だちのまたその友だちに相当するのであろう。あとであの人誰だったと聞いても誰も知らない。昔の記念写真を取り出して、この人誰かなあといひ合うことは普通である。嫁さんのつとめ先の同僚、東京に行った息子さんの会社の上司も客としてやって来た。宴たけなわの時、興に乗って、嫁さんは法被姿になって御柱踊りをみなに披露した。日本舞踊を習われたそうで、見事な踊りである。踊り終って、再び嫁さんはみなに料理をすすめて回るのであった。

何人かの客は心ばかりのみやげを持ってくる。酒、とれたばかりの西瓜など。金銭を包んできた人はいなかった。むしろ、大部分の客は手ぶらである。しかし、客の家での行事、あるいはお祭りに招く、何か不特定の機会における好意など、将来、宴のもてなしに対するお礼はありえよう。親兄弟という濃い血縁者とも異なり、隣近所という確定的な地縁で結ばれるのでもない人々を、宴の飲み食いは取り持つ。ともすれば疎遠になりがちな人々をも、新しい間柄におき換えるといえよう。

III 結 び

——儀礼の構造と社会関係の再生——

諏訪の御柱祭りは非常に危険な祭りである。ことしはひとりの死者を出した。前日も

若い衆がひとり死んでいる。これまで何人も死者を出しており、怪我人も多い。かすり傷ていどの負傷にいたっては、あたりまえのこととして勘定に入らない。御柱祭りが無事終了したという警察の談話は、もっぱら見物人は無事であったと述べているだけである。しかしながら、御柱を止めようという声はまったくなくない。あと7年たてば再び祭りがあることを当然のことと感じ、人々は心待ちに待つ。この前の御柱はこうであり、今度の御柱はどうであったか、と回想しながら諏訪の人人は年齢を重ねてゆく。御柱が終ったあと、人々が道で出会う時の挨拶は、ことしの御柱はよかったね、と言葉をかわすことである。御柱を一つの節目として、ふだんのさまざまに雑多な出来事が記憶の中に位置づけられる。すなわち、人の一生という時間の流れでの経験が、記憶の中では、御柱を節目として共時的に甦る。どうして、御柱が節目になりうるのだろうか。

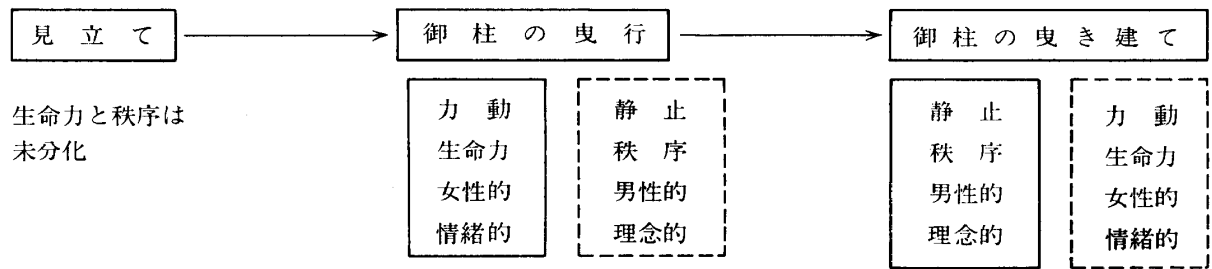
また、現代社会においては、経済合理性の優先、社会の世俗化、著しい利己主義的傾向など多くの相互に関連し合う原因によって、祭りは衰えるであろう、としばしば予想された。現に、村落の氏神の祭りが衰え、形骸化しつつあることを述べる報告はたくさんある。しかし、諏訪の御柱祭りは明らかに違う。少しも衰えていない。何故であろうか。

以上のような疑問に答えるために、筆者は自分が経験したことしの御柱祭りを構造論的に分析して、一つの解釈に到達した。いうまでもないことであるが、筆者の解釈は一つの解釈であって、ほかに多様な解釈がありうることを排除するものではない。まず、祭りの経過から検討しよう。

御柱祭りは明瞭に3部分から構成される。

1. 見立て行事

自然の大木を神のよりしろとする行事で、超越する力が樹木を占有する。7年



実線は現実に顕在化している状態。点線は現在は潜在化している状態。矢印は時間が経過する順序。

図1 御柱祭りの経過

の時間的経過の中に、諏訪上社境内に聳える御柱はその超越する力を枯渇する。人々を加護する神の衰弱は、まさに危機の到来である。新しい神が誕生せねばならない。すなわち、諏訪明神の7年ごとの再生である。新しい御柱に宿る神は、生命力と秩序を未分化のままに保持する。昔、御柱の曳き降ろしに、暗闇の中を松明を掲げて、人々は山を登った。神の顕現は暗闇の中で生じるからである。

2. 御柱の曳行

山出しと里曳きに分かれるが、どちらも力動感あふれる豪壮な行事である。自然の生命力が讃歌される。日常的な秩序は軽視され、祭りに独特な熱気とか浮き浮きする気分が支配的となる。節約は軽蔑され、浪費が好まれる。あるいは、浪費せねばならないのである。祭りの警備に当る警官は御柱を曳く若い衆には口出しできない。若い衆は地区の大総代の指揮にのみ従う。

3. 御柱の曳き建て

祭りの最後の行事である。神社境内で、曳行されてきた御柱を垂直に曳き建てて祭りは終る。御柱は生命力に満ちあふれ、超越する力によって人々の生活を加護する。諏訪明神の加護の下で人々は生産活動を行い、日常生活をおくる。すなわち、超越する力に保護された日常的秩

序の復活である。御柱が倒れると大災害が生じるといふ信仰から、御柱の根本の土地を入念に固めねばならない。

上述の御柱祭りの構成を図1は示す。

図1で示したように、曳き建てられた御柱は直立して秩序を理念的に象徴するが、同時に曳行時に発揮した力動感に満ち、情緒的ともいえる生命力を潜在的に保有する。したがって、秩序は生命力に満ちる。¹²⁾ 7年後、生命力を失った御柱はたんなる材木と観念されて押し下げられる。たとえば、本宮前の食堂の飾りとしての旧前一である。

御柱祭りの大部分を占める曳行について、もう少しみておきたい。御柱曳行は常に豪壮で力動感にあふれるが、前半の山出しと後半の里曳きは一つの対立する組み合わせでもある。すなわち、山出しでは男らしい雄々しさが強調されるに対して、里曳きは華美で浮き浮きした気分が楽しめる。そして、前者から後者への変換点に川越え行事がある。橋を渡らないで、意図的に大変困難な川越え行事を敢行するのである。そこで、御柱曳行過程を構成するいくつかの行事を再び簡単にみておこう。

12) 儀礼における象徴の多義性については、ターナーを参照。
Turner, Victor. 1974. *Social Dramas and Ritual Metaphors*. In *Dramas, Fields, and Metaphors*. Cornell Univ.

木落とし

木落としは山出しのハイライトである。命がけの木落としは、若い衆が自らの雄々しさを社会に誇示する絶好の機会である。この命がけの行事を克服した若い衆は男らしい男であり、女にもてる男となる。以前、諏訪の芸者衆はメドテコに乗る若い衆に手拭いを贈った。若者が危険を克服して、自分が男であることを社会に明示する機会は、一般にイニシエーションと呼ばれる。イニシエーションを通過して、男は女に受け入れられる。イニシエーションでの失敗は同情されない。御柱祭りでの怪我や死亡は、一般的には、不運とかで片付けられてしまうようである。

川越え

川越えは御柱を宮川の流りに浸す行事である。一般に豊饒と懐妊を象徴して、川水が神話と民俗に登場する事例は乏しくない。山から下りた御柱は木落としの試煉を通過して、宮川の流りに浸る。ここで豊饒を身に帯びて、御柱の生命力は全面的に開花する。したがって、川越えのあと、祭りは豊かさで特徴づけられる。たとえば、途方もない浪費である。家の中の宴は里曳きの日だけ行われる。山出しの際には、各家での宴はない。山出しを前曳き、里曳きを本曳きとする呼称は示唆的である。

仮装行列

里曳きでもっとも目立つことは、各種仮装行列の登場である。山出しには、仮装行列はまったく現われない。騎馬行列が過ぎ去った時間を大名・武士の仮装によって表現するに對し、長持ち道中の仮装は同じ時間を共有する間で行われる。たとえば、現代の男が現代の女に扮装する。すなわち、時間レベルと空間レベルの両方で仮装が行われる。空間レベルの仮装では、逆さまということが際立つ。男が女装するとか、後頭部に顔を描くなどである。長持ち道中のオンベの先にオカメの面

が取りつけられ、さらに長持ちにもつく。オカメも超越する力である。オカメの面は福々しく豊かで、里曳きの雰囲気をよく表現する。笠踊りも一種の仮装である。古来、笠は身をやつす手段であり、笠を頭につけることで、人は日常生活から離脱した存在となる[乗岡 1968]。騎馬行列、長持ち道中と同じく、笠踊りもふだんの生活からの離脱した存在である。この結果、ふだんの生活では実現することのない可能性が、仮装を媒介として現実化する。この仮装の持つ豊かさはオカメの福々しさに共通する。

宴

宴は惜しげもない浪費であり、まさに、ふだんの生活での節約の逆さまである。ふだんの食事は食欲の満足であるとすれば、宴での飲食は儀礼的である。ことし、多くの家で、30万円とか50万円があつというまに宴に使われた。ものを惜しみなく消費することは楽しみであり、浪費し尽くせば爽やかである。景気よく、見知らぬ客をももてなさねばならない。同時に、宴では、飲食を媒介として人と人が直接的に関係する。ふだんの生産活動では、特定の身分、地位、役割などを媒介として人は他人と関係する。宴と生産活動では、人と人の間に形成される社会関係はまったく異なる。このことは戸外の仮装行列がふだんの生活とは異なるものを表示することに等しい。仮装行列が家の前を通りかかると、人々は喜んでお祝儀2千円とか3千円とかを包む。さらに、飲食を媒介として形成される社会関係は、さきにみた御柱の綱を曳く人々が綱を媒体として創り出す社会関係にも対応する。すなわち、晴れの日のごちそうと綱は特別な力を所有していて、ふだんの対立する関係を解消させ、人と人が直接的に関係する状態を創り出す。

以上みた御柱曳行の主要局面を図2は要約して示す。

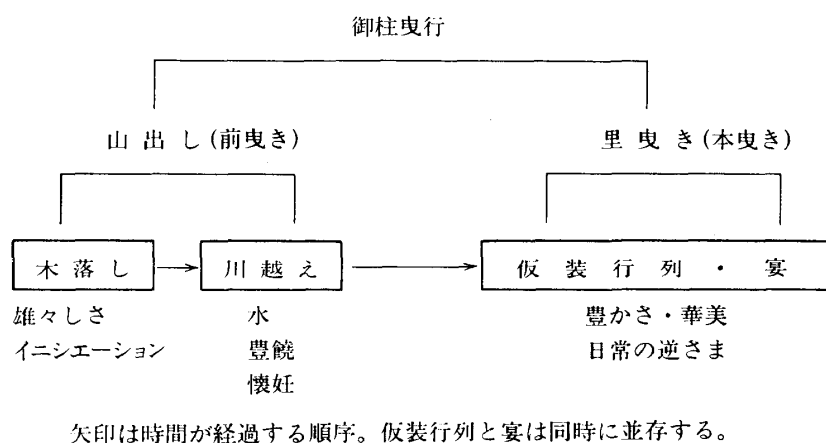


図2 御柱曳行の諸局面

里曳き行事の豊かで華やかな雰囲気が極点に達する時、御柱は上社境内にいたり、冠落しの儀礼を媒介として御柱は垂直に建てられる。里曳きにみられた豊かさの源泉である生命力は、直立する御柱に潜在することになる。人々はふだんの生活に復帰せねばならない。

御柱祭り全体と御柱曳行の諸局面について検討し、三つの事柄が明らかにされた。

- (1) 御柱祭りは諏訪明神の死と再生を物語る儀礼である。
- (2) 祭りの期間、ふだんの生活の秩序は停止する。地位、身分、役割などを媒介として成立している人と人との関係も停止する。替わって、人と人は直接的に関係する。しかし、祭りが終われば、人々はふだんの生活に復帰する。人と人との間の直接的関係によって得たエネルギーは、ふだんの社会関係に転送されて、7年後の御柱を目指して働く。
- (3) 上述の(2)は(1)に含まれながら実現する。すなわち、人々の社会関係の停止と復活は、諏訪明神の死と再生を演ずる儀礼を媒介として実現される。

諏訪御柱祭りをこのように構造論的に解釈すると、この祭りが日本各地で行われる十五夜綱引きと構造的によく似ていることが明らかになる。

かになる。男綱と女綱、男子のイニシエーション、綱を川水に浸ける、竜神信仰、死と再生のシンボリズムなど、御柱祭りと綱引きは共通する要素が多い [青柳 1964: 小野 1972]。すなわち、御柱祭りは綱引きの一つのバリエーションとしてみる事ができるのである。¹³⁾ 御柱の巨大さにくれて、綱がみえにくくな

っているだけである。御柱祭りにおいても、綱は蛇に等しいし、御柱も蛇を象徴する。すでに記述したことから、御柱が蛇の象徴であるとする理由を形態と民俗の両方からみておきたい。

1. 御柱の伐出しで、御柱となる大木の樹皮をはぐ。蛇の脱皮と再生に関わる。
2. 男神の上社の御柱にはメドテコがあり、女神の下社の御柱にはない。メドテコは蛇の男性器にそっくりである。
3. 冠落しで先端が鋭く三角状に削られる御柱は、蛇の鎌首に酷似する。
4. 諏訪明神の御神体は竜蛇であるという信仰が、昔から深く人々の間で行われている。
5. 太古以来のミシャグチ信仰は、男根を示す石柱を御神体としている。この石柱は、また蛇体をも象徴する。
6. 御柱と道祖神は構造的に等しい。

以上の理由から、御柱は蛇の象徴であるとしたい。では、何故、綱引き行事と構造的には等しい御柱祭りに、巨大な御柱が登場せねばならないのであろうか。すでに、蛇を象徴する男綱と女綱があるのではないか。この問題に対して、筆者は次のように考える。太古

13) さらに、渡辺安磨は御柱祭りを一種の綱引き行事と断言していた [松平 1977: 209]。

からのミシャグチ信仰の石柱が御柱に変換して、諏訪明神の死と再生の儀礼に登場する。¹⁴⁾ 死と再生の具体的なあり方は、いうまでもなく、歴史的に変遷を重ねた。とくに、高い土地生産力を基礎とする社会関係は、祭りの具体的な形相に決定的ともいえる大きな影響を与えた。祭りの実行を可能とする組織も、村落を単位とする氏子組織である。しかし、どのように具体的な形相が変遷を重ねても、具体的な儀礼のみえない深部、つまり象徴のレベルにおいては石柱のシンボリズムによる死と再生の神話が繰り返し語られる。この神話は具体的な歴史に対して常に隠喩の関係に立つ。御柱祭りは神話を儀礼的に演じて、社会に活力を与えるのである。

このように御柱祭りを演出する儀礼の構造は超歴史的であるが、逆説的に、祭りの実施は社会が歴史的に変化する契機となる。昔から多くの人々が遠く離れた各地から見物に来ることで明らかのように、祭りは人々の社会関係を地理的に拡大させてきた。ふだんの交際の範囲をはるかに越える拡がりの中で、人人は偶然に相互に関わり合う。もちろん、祭りが終われば、これら拡大した関わり合いも消失する。しかし、祭りのあとに継続する間柄もまた発生する。さらに、宴の儀礼的飲食は人々を浄化し、人と人との間柄を直接的に強める。知り合いの知り合いという見ず知らずの人々とも新たに関係する。祭りでの惜しげない浪費のあと、人々は生業に励む。祭りで確かめられた社会関係が生業を支える基盤となる。拡大された社会関係は生業の規模拡大の契機になりうる。すなわち、祭りを契機とする社会的分業の拡大である。事実、諏訪信

仰の全国的普及と諏訪の人々の各地への進出とは密接に関連する。日本の海苔業者の多くは内陸の諏訪出身者であるという。

社会的分業の新たな展開は新しい歴史形成である。里曳き行事には、過去を象徴する行列が登場し、人々に記憶された歴史を喚起する。まず、御舟である。薙鎌と鈴と白幣を奉じる御舟は神輿で、諏訪明神のよりしろである。従う神主はかつての大祝で、諏訪明神の現身であった。すなわち、御舟は古代大祝の祭政一致を物語る。狩猟がいまだ大切な生業であった時代にも立ち返る。ついで、騎馬行列である。かつて騎馬はお迎え行事を警護し、同時に、超越する力で正当化される封建政治権力を表示した。水田の高い生産力を基礎にした時代である。しかし、歴史は変換し、大祝の祭政一致も封建政治権力も過去の出来事となった。御舟と騎馬行列は歴史を喚起する見世物として、人々の前を練りながら通り過ぎる。高島藩に替わって、矢島ステンレスが騎馬行列のスポンサーであった。騎馬行列は企業の広告としても使われ、現代世界における企業の力を象徴する。高島藩武士が占めた街道沿いの栈敷は、現代は各種企業の御席である。個人で席料を払う人も少なくない。貨幣の時代である。このように、御柱祭りは、古代から現代にいたる歴史の変換を3類型に分けて展示する。しかしながら、歴史の変換にもかかわらず、太古のミシャグチ信仰は祭りにおいて超歴史的に顕現し、死と再生の神話の儀礼的実現を可能とするのである。

(後記 小稿は、立教大学文学部の筆者の演習に参加した学生の共同調査の成果による。ただし、文責はすべて筆者にある。現地調査に対して、惜しみなく協力していただいた地元の方々に深く感謝いたします。)

14) すでに、宮坂光昭はミシャグチ信仰の石柱と御柱の関連について示唆していた。宮坂光昭、1975。「蛇体と石棒の信仰」『古代諏訪とミシャグチ祭政体の研究』古部族研究会(編)、80ページ所収。永井出版企画。

参 考 文 献

- 青柳真智子. 1964. 「綱引きについての一考察」『石田英一郎教授還暦記念論文集』角川書店.
- 伊藤富雄. 1978 a. 「諏訪上社長官の研究」『伊藤富雄 著作集 第1巻 諏訪神社の研究』所収. 永井出版企画.
- . 1978 b. 「諏訪神社の竜蛇信仰」『伊藤富雄 著作集 第1巻 諏訪神社の研究』所収. 永井出版企画.
- 古部族研究会(編). 1975. 『古代諏訪とミシヤグヂ 祭政体の研究』永井出版企画.
- 松平齊光. 1977. 『祭 本質と諸相——古代人の宇宙——』朝日新聞社.
- 宮地直一. 1931. 『諏訪史』第2巻前編. 信濃教育会.
- . 1937. 「御柱考」『諏訪史』第2巻後編. 信濃教育会.
- 宮坂清通. 1956. 『諏訪の御柱祭』甲陽書房.
- 乗岡憲正. 1968. 「やつし考」『古代伝承文学の研究』桜楓社.
- 小野重朗. 1972. 『十五夜綱引きの研究』慶友社.
- 友杉 孝. 1979 a. 「経済蓄積の形態と社会変化——梓川水系の事例——」国際連合大学. (限定配布)
- . 1980. 「溜池と村落社会——文化としての溜池——」国際連合大学. (限定配布)
- 吉野裕子. 1979 a. 『蛇 日本の蛇信仰』法政大学出版局.
- . 1979 b. 『陰陽五行思想からみた日本の祭 伊勢神宮祭祀・大嘗祭を中心として』弘文堂.
- 毎夕新聞. 1980年5月1日. 『諏訪の御柱祭』
- 南信日日新聞. 1980年5月4日.